

北陸街道を歩く (富山城址～峠茶屋～小杉手崎)

(1) 旧北陸街道の概要

街道とは、国中に通ずる官道、または主要な陸路、海道とも書く。街道の始源については、すでに大和（やまと）朝廷の成立後、大和を中心に開かれた。大宝律令では、国を畿内以外に東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の7街道の沿線地域に編成し、越中では国府を伏木に置いた。これら国司や命令の伝達、報告、貢納物の輸送などのため原則30里（20Km）ごとに駅馬、人夫などを置いた。

富山では倶利伽羅峠を越えて坂本（小矢部市坂又）、川合（福岡町赤丸）、日理（伏木）、白城（下村）、磐瀬（岩瀬）、水橋（水橋）、布勢（三日市）、佐味（宮崎）に八つの駅があった。

その後時代の変遷に伴い経路に変化があり、坂本から戸出、中田、水戸田、安養坊、富山、水橋、魚津、三日市、舟見、入善、泊から糸魚川に至るルートが代表的な官道となった。

江戸時代になると今石動（坂本、小矢部市坂又）から高岡、小杉、下村、草島、岩瀬、水橋に至るルートが誕生し加賀前田藩の参勤交代路となった。また高岡富山を結ぶ道路として小杉手崎から願海寺、追分茶屋までの富山道が整備された。

このように北陸街道は、中世までが京都への道であり、その後近世で中山道につながり江戸に向かう道となった。

(2) 富山城の変遷

戦国時代以降の越中富山は、神保・椎名の守護代争いに始まり上杉・武田の勢力争いを経て、織田、豊臣の全国統一、そして江戸時代の安定するまで多くの戦場となり、富山城も幾度となく城主が変わった。

富山城は、越中守護代、神保長職が、天文12年（1543）新川郡を支配していた椎名氏に対抗する拠点として現在の地に築城されたのがはじめとされる。

その後、長職が永禄3年（1560）上杉謙信に攻められ逃たため富山城は、上杉と一向一揆（武田信玄が本願寺との盟約、永禄8年、1565）との戦いの場となる。武田信玄の死去（元亀4年、1573）により、謙信が本願寺と和睦（天正4年1576）し、越中一国を支配する。

その後、天正6年（1578）上杉謙信が死去したため、織田信長が神保長住（長職の嫡子）を越中へ帰すなど勢力を伸ばし、上杉勢との戦いが始まる。やがて佐々成政が派遣（天正8年、1580）され、天正10年3月（1582）富山城を奪還し富山城主となる。

その直後に織田信長が本能寺で死去（天正10年6月）したため豊臣秀吉が明智光秀を討ち、やがて賤ヶ嶽（天正11年6月）や長久手の戦い（天正12年4月）などを経て第一人者となり佐々成政は、孤立無援となる。

成政は、天正12年12月（1583）立山の「さらさら越え」をし徳川家康に助けを求めたが受け入れられず、ついに天正13年8月（1584）豊臣秀吉の越中攻めを受け富山城を明け渡す。その後富山城が破却される。

秀吉は、越中3郡（砺波、射水、婦負）を前田利家の嫡男、利長に与え佐々成政に新川郡のみを与えたが、やがて成政が肥後の国へ配置替えされ、新川郡を利家に任せ越中4郡を前田家の支配とした。

利長は、慶長2年（1597年）富山城に入るが、翌年利家の隠居により金沢に戻る。慶長5年（1600）関ヶ原の戦いの働きにより能登、加賀、越中120万石の領主となる。

利長も慶長10年（1605）家督を末弟の利常に譲り、隠居して再び富山城に入り大改修をするが慶長14年3月（1609）大火により焼失し、高岡城を築いて同年9月に移る。その後一国一城令（元和元年、1615）により高岡城も廃止になる。

加賀城主前田利常は、江戸幕府の警戒心を恐れ、寛永16年（1639）二男利次に富山藩（婦負郡、新川郡の一部、加賀の能美郡の一部、10万石）と三男利治に大聖寺藩（加賀能美郡）を分封し誕生させた。

翌年、富山藩主となった前田利次は、呉羽山の北側、百塚に築城する予定で富山城（加賀領）に入ったが、万次2年（1659）富山城を加賀藩から譲り受け、加賀藩領である周辺領地と新川郡の浦山（宇奈月町）、加賀能美郡と領地替えし領地を確定した。これにより、藩主利次は、富山城を本格的に整備し以降、明治に至るまで約200年間、富山前田家13代の居城となった。明治6年（1873）明治政府の廃城令により外堀が埋められ、土塁が取り壊された。本丸にあった藩主の御殿は、富山県庁に使われ、千歳御殿の門が米田の赤祖父家に譲られた（平成20年富山市に寄付され富山城址公園に移転する）。そのほか家老職の門も本郷の中田家に移築された。

（3）富山の城下町

富山町は、北陸街道と飛騨街道が結ぶ交通の要所で沿線に古くから町並みができ、西は金屋の渡し場から東はいたち川まで1里（4Km）南は町人が住み南東に寺町があったと「富山之記」に記されている。また城下町の町割りには前田利長が最初に富山城に入ったころ（慶長10年、1605）に行なわれたが、大火にあたりして本格的には富山藩が誕生してからの寛文元年（1661）ころと思われる。

富山城は、外堀と内堀があり、北は神通川（今の松川）、西は七軒町通り、南は総曲輪通りと中央通り、東は桜木町中央通りの範囲に外堀が廻らせられ、現在の富山城址の約6倍の規模を誇っていた。

城下町は、富山城を中心に西は神通川の右岸から、東はイタチ川を越え、南は四ツ谷川付近まで、町域を約3倍に広がった。

（4）城下町での北陸街道

北陸街道は、呉羽山峠を越えて、五福、桜谷を経て愛宕の船頭町で神通川を船橋で渡り、七軒町で城下町（富山城の北西隅）に入った。七軒町では助作川の橋に門があり夜は閉ざされ、西へ迂回することになっていた。街道は、富山城の外堀に沿うようにして旅籠町、西町、中町、東四十物町を経て城下を通過し、イタチ川を越えて加賀藩に入り水橋へ向かった。また西町の大田口では飛騨街道と結ばれていた。

（5）越中富山の船橋

富山城址公園の北側を流れる松川は、神通川を直線化する馳越工事の完成（明治36年、1903）によって残された旧神通川の一部で、江戸時代では富山城下へ入るときに川幅の広い神通川を船で渡らなければならなかった。

渡船場は、木町にあつて「神通川渡船の掟」が天正年間（1573～1591）に定められている。その後、慶長元年（1596）に舟を横に並べ鎖でつないだ船橋が架設され常時渡れるようになった。

寛永17年（1640）に富山城に入った前田利次は、早々にして木町にあつた船橋を七軒町に移設しており、正保4年（1647）に作製された「越中国古城之図」でも確認できる。

舟の数は、元和3年（1617）32艘、寛永8年（1631）52艘、万次2年（1659）64艘と架け替えるたびに多くなっており、架設場所による川幅の変化が読み取れる。

舟橋の場所は、現在、松川に架かる県道小竹・諏訪川原線の舟橋で、橋詰の広場に当時の右岸の常夜燈があり、北200mほどの森林会館の前に左岸の常夜燈がある。

当時の舟橋は、全国的にも「越中富山の船橋」と呼ばれ、版画や十返舎一九の文にも記されている。

（6）船橋北・橋北

船橋の北側一帯は、「船橋北」また「橋北」と言い、文政2年（1819）に城下町へ組み入れられ、船頭町、藤井町、手伝町、愛宕町、舟橋今町、舟橋新町、舟橋散地町、御福新町が旧北陸街道に沿うように連なっていた。明治に入って間もなく婦負郡の郡役所（明治11年、1883）が愛宕町に置かれたが、その後藤井町そして五福に移転され、大正4年（1915）廃止となった。

(7) 愛宕神社（愛宕町）

愛宕神社は、室町時代の万見郷（富山市石坂）にあったとされる。その後神通川の変遷に伴い現在地愛宕通り（北陸街道）の南側に編座された。富山藩時代は、藩の鎮火守護の神様として崇敬され、明治の神仏分離の時に旧御神体の地蔵菩薩（木像、錫杖をもった延命地蔵）が船頭町の地蔵堂へ移転した。体内に「長祿元年（1457）夏、愛宕大権現、越中国婦負郡万見郷、五十嵐次郎左衛門敬白」と明記されている。

(8) 呉服山長光寺（五福）

長光寺は、五福の北陸街道南側にあるが、およそ900年前、呉羽山安養坊で「延命安寧坊」を建立したのが始めとされる。境内に佐々成政の黒ユリ伝説となった愛妾早百合が祀られていると言う墓がある。

(9) 熊野神社（五福）と「鬼頭崎岩右衛門の碑」

婦負の郷、熊野の熊野神社の分社として御服大御堂（野球場前）に祀られ、その後現在地へ遷宮された。社紋は、前田家の「梅鉢の紋」で拝殿正面にあり、絵馬に「八咫鳥」が掲げられており同じく社紋となっている。また境内に「鬼頭崎岩右衛門の碑」が建っている。以前は、北陸街道が呉羽山の峠に向かう途中の飯田庄一郎（五福10区）宅にあったが、昭和30年ころ現在地に移転した。

江戸相撲の鬼頭崎は、明和8年（1771）に6~7人の弟子と共に越中に来て地方相撲の発展に大きく貢献し越中勸進相撲の始まりをなし、その後鬼頭崎岩右衛門の功績を讃えて石碑が建てられた。掛尾出身の大関剣山谷右衛門が削り取られて無くなりそうな石碑を見て天保5年（1834）に再建した。江戸大相撲の一行が石碑の前を通る時は、必ず馬や駕籠から降りて拝礼したと言われ、また富山で勸進相撲が行われる時に詣でることが作法として引き継がれているという。

(10) 皇恩軒

明治天皇が明治11年（1878）北陸巡幸の時、呉羽山の五福新道を越えるに当たり、馬から板輿しに乘換えられた。その時小休されたのが尼寺の曹洞宗観音寺で北陸街道との分岐点にあった。その後皇恩軒と改めたが、昭和20年8月（1945）の富山大空襲により焼失してしまった。北陸街道は、この地から南に折れ、五福の藤子で西に向かい呉羽山の峠へさしかかった。沿道には江戸時代の絵図のとおり松並木があったが戦前、戦後になくなっていった。

(11) 五福新道

峠茶屋を越えていた北陸街道が急なため明治天皇の北陸巡幸（明治11年1878）にあたり新たに整備された道（約1.2Km）。

明治天皇は板輿で呉羽山を越えられたが、そのご何度か拡幅改修され荷馬車等が越えられるようになり、旧国道8号（現在県道富山高岡線）が開通するまで呉羽山越えの本道であった。大正8年（1919）の大改修の様子を記した「呉羽修路の碑」が山麓に建っている。

(12) 足立塚

五福の藤子から呉羽山の峠へ向かう北陸街道の沿道に多くの石碑が建っていたが、現在残っているのが、城山公園内の「足立塚」である。

足立塚は、天和年間（1681~1683）に飛州高山から富山に来て「四心多久間見日流和術」を教え多くの門弟を育てた足立平陸正保の功績をたたえ、門弟池崎吉清らによって天保13年（1842）に建てられた石碑である。

富山2代藩主、前田正甫は見日流和術を高く評価し、見日流和術の秘伝を足立正保から授けてもらった第一人者渡邊繁正を召抱え、富山藩の御留流柔術として広徳館で藩士に教えた。このことから町民にも広まり、現在も

富山市空道館で伝えられている。

「付近に建っていた石碑」

- ・中田文敬碑（享和3年、1803建）加越能三州閩流算学の元祖、（現在地、梅沢町極楽寺）
- ・芭蕉塚（寛政5年、179建）芭蕉の百回遠忌追善の碑（現在地、愛宕町愛宕神社）
- ・花乃知里塚（文化6年、1809建）越中の華道、茶道、盆景の基礎を築いた「鳥山紫山」を讃えた碑（現在地、千石町西福寺）

（13）七面堂

現在の七面堂は、約350年前の万治年間（1658～1660）に呉羽丘陵の明神山（稲荷神社付近）一帯で創建されていた七面堂（明治3年合寺令で取壊される）をこの地に移転・再建、しかし昭和19年火災で焼失したため再々建されたものである。お堂には、当時の七面大明神、長久院のご本尊が祀られている。さらに参道の登り口や裏山に当時の石碑や常夜燈が安置されている。

（14）呉羽山峠（安養坊坂）

約50mの標高ではあるが、北陸街道が呉羽丘陵を越える峠。街道は、時代の変遷に伴い、浜街道、山街道などが整備された。この街道は古代からあり勅使道とも呼ばれ、西から今石動、戸出、中田、水戸田、峠茶屋、そして富山町に入る道であった。

寛永10年（1633）、加賀藩奉行の槍持ちをしていた「清左衛門」が安養坊坂の峠に茶屋建てを許されてから、茶屋が建ち並び今も「アメヤ」「マンジュウヤ」などの屋号が残っている。特に富山藩が誕生してから、明神山の七面堂など神社仏閣の賑わいと共に栄えたところである。明治11年、明治天皇の北陸巡幸にあたり、新たに「五福新道」が整備されたため北陸街道としての使命を終え次第にさびれていった。

（15）稲荷神社と七面堂

稲荷神社は、明治初頭に壊された七面堂などの跡地一角に、五穀豊穰などを祈願して建立された神社。今も、この一帯を明神山と云うように初代富山藩主前田利次公から土地を拝領した富山藩士奥村蔵人が甲州身延山の七面大明神と同形の木像を祀る七面堂を創建した。その後二代藩主前田正甫公が建立した武運山長久院や九代藩主利幹公建立の妙見堂などが建ち並び、そして山上には、三重塔が高くそびえ、富山湾から望遠出来た常夜燈が置かれていた。

当時の賑わいは、今も残っている絵図、絵馬などからうかがう事が出来る。特に建物群は妙法山立像寺に残っている七面宮模写図からみると技術的にも大変高度な七面造の本堂、軒唐破風の神門などが描かれており往時の隆盛をみる事が出来る。

（16）三茶屋の由来

北陸街道の沿線で「茶屋」の名がつく集落は、峠茶屋・中茶屋・追分茶屋で順に西に向かってつながり総して「三茶屋」とも言われてきた。

三茶屋の中で最も古いのが峠茶屋で、寛永10年（1633）清左衛門が1町四方の山を拝領し家立てが許されたのがはじめである（「内山家文書」）。追分茶屋は、承応元年（1652）久右衛門・伝吉・彦兵衛・忠右衛門の4人に家立てが許されたのが初めて、中茶屋は追分茶屋が成立してから8年後の万治3年（1660）に家立てが許されている。

村名は、峠茶屋がその地形に由来し、追分茶屋は道の分岐点、つまり「追分」に位置したことから生まれた。これらに対し中茶屋は、両者の中間にあり、中間茶屋とも言われた。

（17）明治天皇御小休所・島崎家

明治11年（1878）明治天皇北陸巡幸のおり、五福の皇恩軒で小憩されたあと呉羽山を越えて初めて休憩されたのが、この島崎家である。以前の島崎家は道路に面した大きな葛屋根の家であったが、今は敷地内

の後ろに建て替えられている。街道に面して「明治天皇中茶屋御小休所」の石碑と案内板が立っている。天皇巡幸を記念して昭和10年に当時の文部省が立てたが、石碑と案内板が風化したため、平成14年に地元住民がもとの形に準じて建て替えたものである。

(18) 追分茶屋と三つの道しるべ(道標)

追分茶屋の集落は比較的長く、右手にお寺、その斜め向かいにお茶屋などが見える、明治天皇御巡幸の際、土壁の塀がある家に対し、「見苦しくないようにせよ」と県から命じられ、紅がらを塗ったという話も古老から伝えられている。

集落のなかほどに三叉路があり、北へ向かう小杉・高岡方面への道(富山往還)と西へ向かう古代からの北陸街道(巡見上使道)の分岐点である。

この交差点に現在3か所に道しるべが残っているが、長い時間的な経過の中で何回も立て直されたと考えられる。

1箇所目は、三叉路の左手(山側)にある地藏堂で、中に大2体、小2体の道標石地藏が安置されている。右の石像の光背に享保2年(1717)とあり、台座裏に「右ハ金沢道、左ハ三と田道」と刻まれている。これは見るのが困難だが現地を確認している。

2箇所目は、自然石道標で個人宅の敷地内に入っているの、自由に見ることはできない。石には「西ミとたみち、向かがみち、東とやまみち」と書かれていることがわかっている。

3箇所目は、神明社前の鳥居脇に据えられている。元はここにあったのではなく、三叉路の脇にあったのが移設されたのである。その道標には東側面に「立山道」、南側面に「小杉道」、西側面に「城端水戸田道」と刻まれている。

その他、三叉路から西へ少し行った巡見上使道で道路工事が行われたとき地中から出てきたと言う石柱道標があり、長い間神明社前の鳥居脇に仮置きされていた。四つの表面に「左 富山」右回りに「右 京ノ国」「左 井波」「中嶋六兵衛」と刻まれている。

しかし平成24年10月、巡見上使道から神明社に登る細い参道のわきに建てられた。

また巡見上使道に面した高源寺前の地藏も道しるべ地藏であると言う人もいるが、現地を確認したところ石仏には、行き先の地名などが刻まれておらず、道標ではなかった。

(19) 吉作・東京町

北陸街道が追分茶屋から北へ500mほど入ったところ一帯が東京町と呼ばれる。江戸時代に大変賑わった場所、お茶屋、酒屋、そば屋、桶屋、風呂屋、牛鍋屋、豆腐屋、床屋、瓦屋、油屋、よろず屋等の店が建ち並び活気あふれる町並みであったとされる。なかでも昔の商家と思われる家の軒瓦や鬼瓦に七福神などをあしらった飾り瓦があり当時のたたずまいを残している。

また道ばたに石仏像が刻まれた「三界万霊」の碑があり「天保二卯年三月〇日」と読まれる。さらに西のはずれに風化した地藏が祀られている。以前、近くの杉原の川(現小竹用水)にお地藏様が流されてきて埋まっている夢を見た人が、すぐ川にかけつけ川底からお地藏様を救い出し家の横に地藏堂を建て祀られたという。

(20) 富山藩の藩境・野口と三界萬霊

北陸街道は、小竹用水の「杉原橋」を渡って西に向かうと富山藩の藩境・野口にでる。

野口の村はずれの一角に古い地藏尊(高さ1.7メートル)がブロック塀に囲まれて立っている。天保4年(1833)3月の造りで台石に「三界萬霊」と刻まれている。地元の人、この地藏尊がある道を「往還」と言っており、昔からこの道筋にあって旅人の道中の安全と道標の役目をもっていたものと思われる。

(21) 「銀坊主」の生みの親・石黒岩次郎

野口の北陸本線の踏切のわきに石碑が建つ。食糧増産をうたわれた明治時代、野口に住む岩次郎は、家の前に試験田を作るなど稲の品種改良に20年もの年月を費やし努力を重ねていた。ある時田んぼの一株にすくっと立っている稲を見つけ、モミの多さ、株の根張りなどに優れた品種を発見し、これを「銀坊主」と名付けた。その後、またたく間に全国や朝鮮までに広がったが、これを知らずに63歳で生涯をとじた。

昭和3年、町田忠治農林大臣の手により岩次郎の功を讃える石碑が建てられた。

(22) 願海寺七曲りと願海寺城址

北陸街道が願海寺へ向かうが、所々で名高い「願海寺の七曲り」古道の面影を見せる。石動の俳人、宇白が元禄13年(1700)撰の『草庵集』に「願海寺の七まがりといふ処にて」と題して「よけて行く稲つけ馬や沼田道」、また加賀の句空も「秋の日にまがりかかるや願海寺」の句を収めている。

集落の中の圃場整備された道は、再び北陸本線(館本踏切)を南に渡るが、手前に「往還道路の願海寺の七曲り」(呉羽山観光協会)の説明板が立っている。

地元ではここらを「七軒町」と言い「往来」とも言っている。道は、西に折れて県道東老田-白石線を渡るが右手の奥、水田の中に「願海寺城址」の石碑が立っている。

戦国の武将で、織田信長に謀殺された寺崎民部左衛門の城の跡である。湿地の真つた中であつて沼田を要害とした平城であつた。

(23) 願海寺の茶屋

北陸街道は、県道「東老田・白石線」を渡って通称「茶屋」と呼ぶ集落に入る。今も道の両側に十数軒の民家が立ち並び、往年の街道の面影を残している。

左手に瀧脇家があり入口に地藏堂がある。堂内に安置された石地藏の両側に「右 小杉道」「左 とやまちか道」と彫られている。

この石地藏はもと邸内に祀られていたが、お告げによって外に堂を建てたものだと地元の人言う。道標を兼ねた地藏で刻まれた案内から見ると元の場所は現位置よりもっと東寄り館本集落の東端であつたものと思われる。

瀧脇家の隣が舟竹家で、その門には「明治元年三月勅使高倉三位永祐御泊遺跡」「明治七年三月順徳天皇神霊御還遷二付御小休遺跡」と読める表札が貼られ、注連縄がかかっている。

慶応4年(1868)1月、鳥羽伏見の戦いで勝利した新政府軍は、徳川慶喜^{ながさち}追討令を發し北陸各地の藩主21人に勅書に対する請書を差し出すことを求めた。北陸道鎮撫使総督の高倉永祐^{ながさち}が同年1月20日京都を出発し、3月10日に舟竹家に着いている。総勢1500名に及ぶ大部隊であつた。舟竹家には、今も高倉勅使が休憩された座敷が残されている。

次の家が佐崎家で「明治天皇願海寺御小休所」の石碑及び説明板が立っている。瓦葺の黒い堅牢な木門が明治11年当時のまま立ち、庭も行幸当時のまま保存されている。また御小休された「御座所」がそのまま保存されている。

また江戸時代には、両家の間に砂川が流れ射水郡放生津潟の加賀藩米蔵へ年貢米を運んだ舟着き場があり「茶屋」と呼ばれた地域である。腰掛け茶屋、宿屋、店やなどがあり大変賑わつたところであるが昭和52年(1977)排水路工事で川が埋められ舟着場も消滅して面影を無くした。当時茶屋は、船が運こんだ荷を地藏前で売買されたと言うとおり明治初頭の史情が濃厚にただよう一角である。

街道は、集落を抜け西へ進むと北陸本線に当たる。ここに昭和10年頃まで小さな官舎があつて一人の番人が土福踏切の遮断機を操作していた。

今は小さな踏切と成っているが、これを渡って北側に出る。やがて新堀川の土福橋を渡ると西二俣の集落に入る。江戸時代の絵図では西二俣の集落のそばを鍛冶川が流れており、橋に願海寺二俣境橋と書かれている。現在、鍛冶川は北陸本線の南側で砂川などと合流して新堀川となっており、圃場整備によって街道の面影を無くしている。

(24) 西二俣の茶屋 及び長福寺

北陸街道は、西二俣の集落にかかると道筋が明確である。地元では「二俣の茶屋」と呼び10軒余りの民家がある。

ここにも鍛冶川に舟着き場があつて天明年代(1781~88)の頃、12艘の舟が発着していたと言われ、中老田の加茂社に「三十石船」の絵馬が奉納されている。

道は、西へ進み県道富山-小杉線と交又する。「往来絵図」にも「中老田村道」と記載され、北は下村、南は中老田へ向かう道である。

交差点には旧北陸街道を挟んで日枝社と長福寺とがある。長福寺は浄土真宗本願寺派で山号を白鳥山といい、明応6年(1497)順正が蓮如の弟子となって開いた寺と伝え、境内に「蓮如上人旧跡」の碑が建っている。

北陸街道は、集落を抜け北陸本線に沿って西へ進むと道ばたに地藏堂のほか「二本松九平の碑」、「日露戦役戦死者碑」などが建つ。

そしてやがて射水市へ入るが「往来絵図」によると、このあたりに「道番」が記載されている。

(25) 加賀往還道・大手崎

射水市に入ると北陸本線沿いが工場地帯となって昔の街道筋が分からなくなっている。

さらに街道は、西へ進み県道富山 - 高岡線（旧国道 8 号）と出あう。これを斜めに横切り、手崎の集落に入り約 300 メートル歩くと大手崎の辻に出る。この間は、道幅も狭く両側に旧家や屋敷林を望み街道の面影を色濃く残すところである。

辻には、加茂社があり戦国時代から江戸時代にかけて市が立ち大変繁盛した所で、加賀往還との分岐点でもある。

天保 10 年(1839)の「射水、婦負、新川三郡御廻往来絵図」では、この地点を起点として描かれている。

この辻に道標が二基並び立つ。一基は四角柱状で風化磨滅して「□□□菩薩」「□□みち」「□□みち」とかすかに読める程度であるが、いま一基は自然石で、「右 とやま」「左いはせ」と明確に読むことができる。道標のとおり北は、下村を経て東岩瀬に至り、西は小杉から高岡など経て加賀に向かう「加賀往還道」である。